

JECの流れ(神学)の
継承・深化・発展の最良の手段
としてのエリクソンの「キリスト教神学」
総論 : JECの神学方法論について

エリクソン博士をお迎えしての
「JEC拡大教職者会」レジュメ
関西学院会館:2003.3.11
一宮基督教研究所:安黒務

「歴史的ルーツと連続性」への呼びかけ

1. 聖書と聖霊さえあれば、過去と無関係？
2. キリスト教遺産の豊かさを見失う
3. キリスト教遺産の回復の要請
4. 教会の歴史 - 聖書に従って教会を改革しようとする福音主義的衝動
5. 福音が聖霊の働きによって解き明かされた
6. 聖書の示している福音の枠を守りつつ
7. 他の時代や他のもろもろの運動から学び取る
8. 福音の全体的意味・十全な意味で福音主義的

歴史神学の視点からみたJEC

1. 三つの要素
2. 使徒的キリスト教
3. 古代教会の正統信仰
4. 宗教改革の三大原理
5. 改革の四つの流れ
6. 信条
7. 正統主義神学
8. 敬虔主義の遺産
9. 自由教会

1. リベラリズム
2. エリクソン博士
3. 結び



組織神学の視点からみたJEC

1. 多種多様な「組織神学」テキストの存在
2. 改革派、ルター派、ホーリネス・メソジスト派、バプテスト派、ペンテコステ・カリスマ派等
3. JECにおける「組織神学的特色」は？ 「十字架のメッセージ・聖霊のバプスマもしくは満たしの強調」 - しかし神学的座標軸はどこに？
4. 「JECの源流と歴史的遺産」 - 最も包括的な体系的理解 - 会衆派ピューリタンの時代「正統主義神学」
5. オレブロ宣教師 - スウェーデン・バプテスト諸教会を背景に「バプテスト的な教会観」に基づいた教会形成：会衆制、浸礼、象徴説
6. 高橋昭市師による「H. シーセンの組織神学」教育：バプテスト的特質の継承に貢献
7. 正統主義神学を座標軸に、バプテスト的強調・ケズィック的強調・カリスマ的強調

H. シーセンとM. エリクソンの比較

■ シーセン

1. 教會的・実存的
2. 要約的・再生産的

■ エリクソン

1. 教會的・実存的
2. 要約的・再生産的
3. 生産的・新理解的
4. 合理的・学問的

JECの伝道・教会形成の現場で『キリスト教神学』をいかに学ぶか

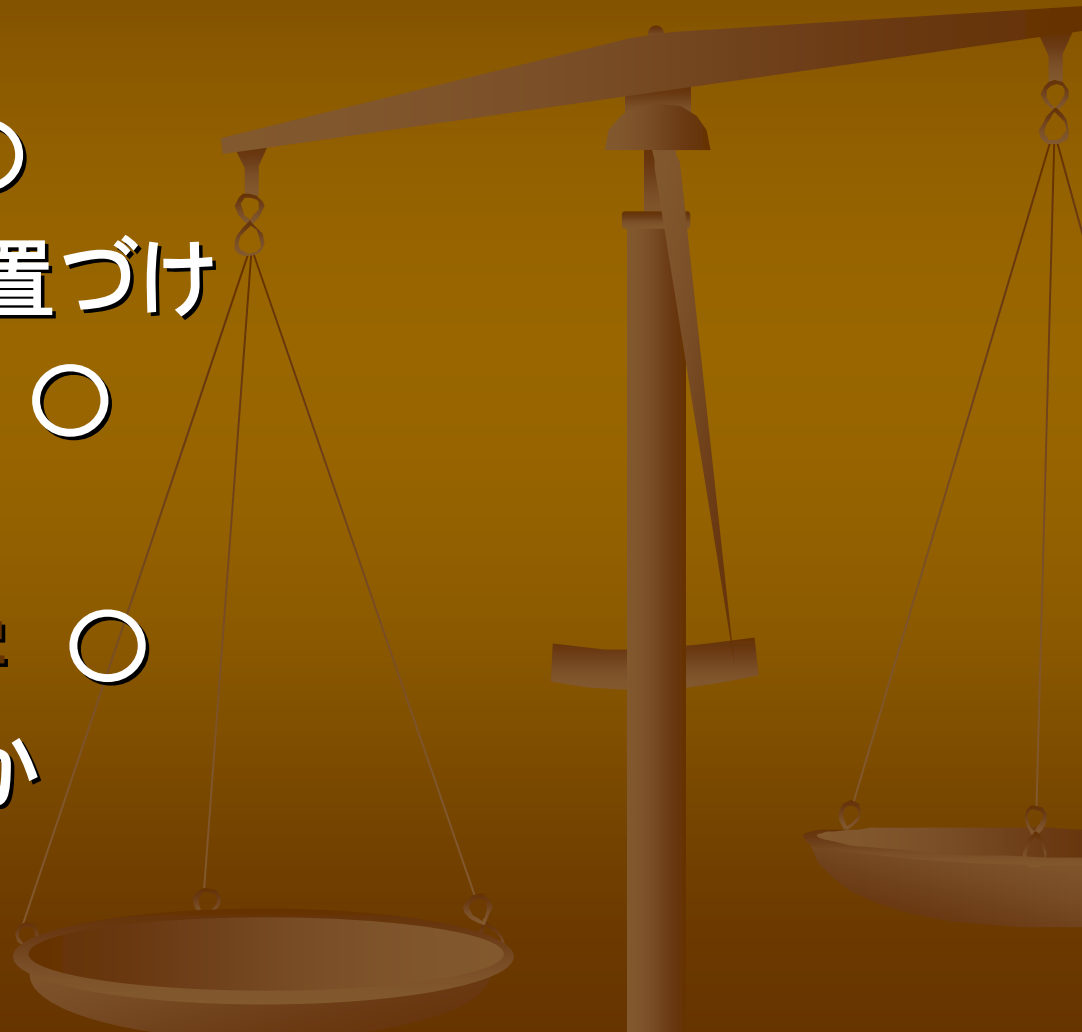
■ 第1巻の第1部の学び方

1. 神学とは何か ○
2. 神学と哲学 ×
3. 神学の方法 ○
4. 神学と聖書の批評的研究 ×
5. キリスト教のメッセージの今日化 ○
6. 神学とその言語 ×
7. ポストモダンと神学 ×

- まず、読みやすく実際的な必要にかなう 1, 3, 5章を丁寧に学び、
- × 将来必要が生じた場合に難解な 2, 4, 6, 7章を学ぶ。

第1章 神学とは何か

1. 宗教の本質
2. 神学の定義 ○
3. 組織神学の位置づけ
4. 神学の必要性 ○
5. 神学の出発点
6. 学としての神学 ○
7. なぜ聖書なのか



JECにおける「神学の定義」のあり方


1. 第一義的に聖書を基盤とし
2. 文化一般の文脈の中で
3. 今日的な表現を用いて
4. 生の諸問題に関連づけながら

キリスト教信仰の諸教理についての
首尾一貫した言明をするべく努める
学である。

J E C 神学の必要性：無益か有益？

- イエスを愛しているなら、それで十分？
- 神学 複雑で難しく、伝道の妨げ？
- 群れ 神学的理解の相違が分裂へ？
- 1. 信仰者と神との関係 - 正しい教理が不可欠
- 2. 真理と経験 - 相互に関係
- 3. 擬似宗教・偽りの教え - どのように識別

「学として」のJEC神学のあり方

1. 明確な対象 - 例：教会政治、洗礼、聖餐の様式・意味
 2. 首尾一貫した道筋
 3. 説明責任：盲目的継承 理解し納得づくで
 - なぜ会衆制なのか？
 - なぜ浸礼の様式なのか？
 - なぜ象徴説なのか？
- 

第三章 神学の方法

1. 今日の神学の状況
2. 神学研究の過程
3. 神学的言明の權威の度合い



JECと「今日における神学の状況」

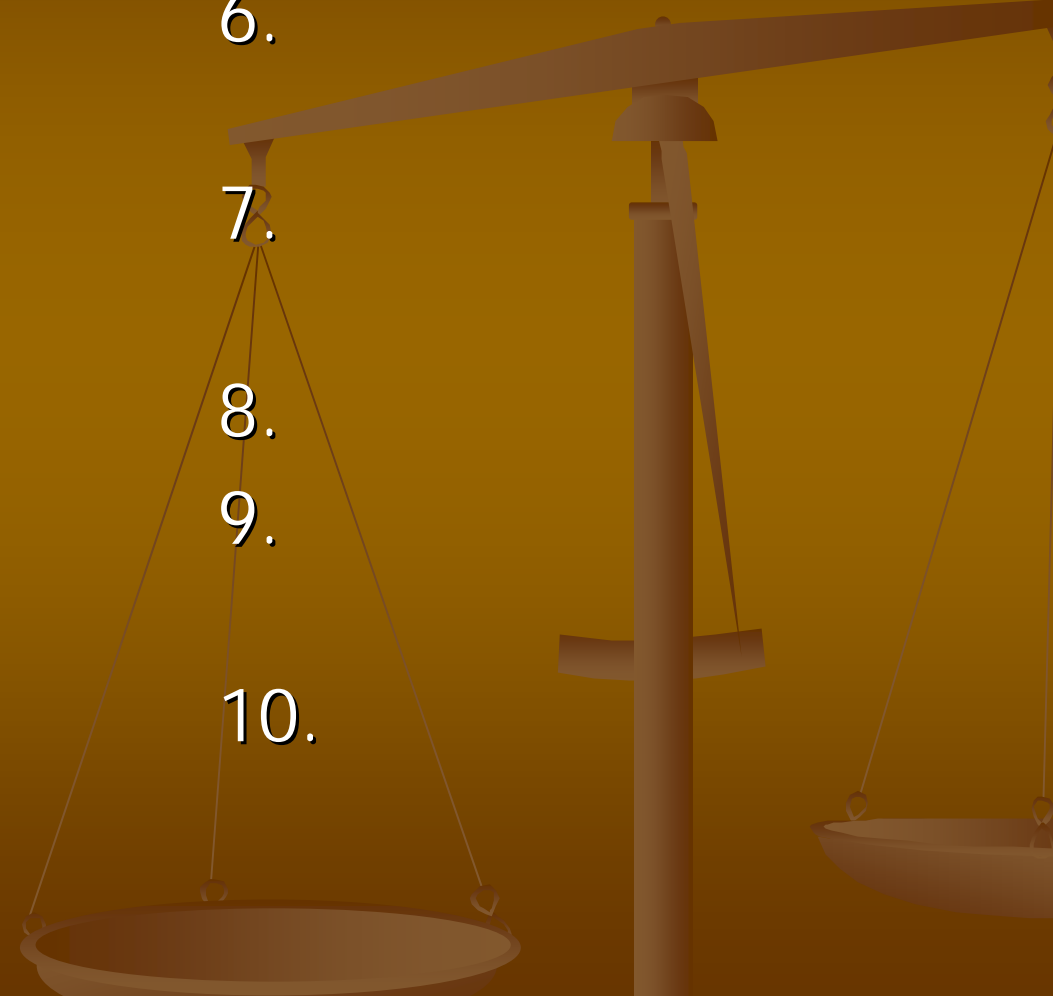
1. 神学の今日的状況

1. 神学の短命化
2. 偉大な神学学派自体の消滅
3. 神学的巨匠の不在
4. 種々の行動科学の影響
5. グローバリゼーションの傾向

2. 教訓

1. 最近の文化・風潮に同調しすぎるな：神学の急激な変化 文化一般の急激な変化
2. ある程度の折衷主義が可能：狭い基盤で聖書資料の収集・統合はいけない
3. ある程度の独立性：盲目的継承 最も悪い弟子、思考の停止 改善できる点を進んで修正しうる者に

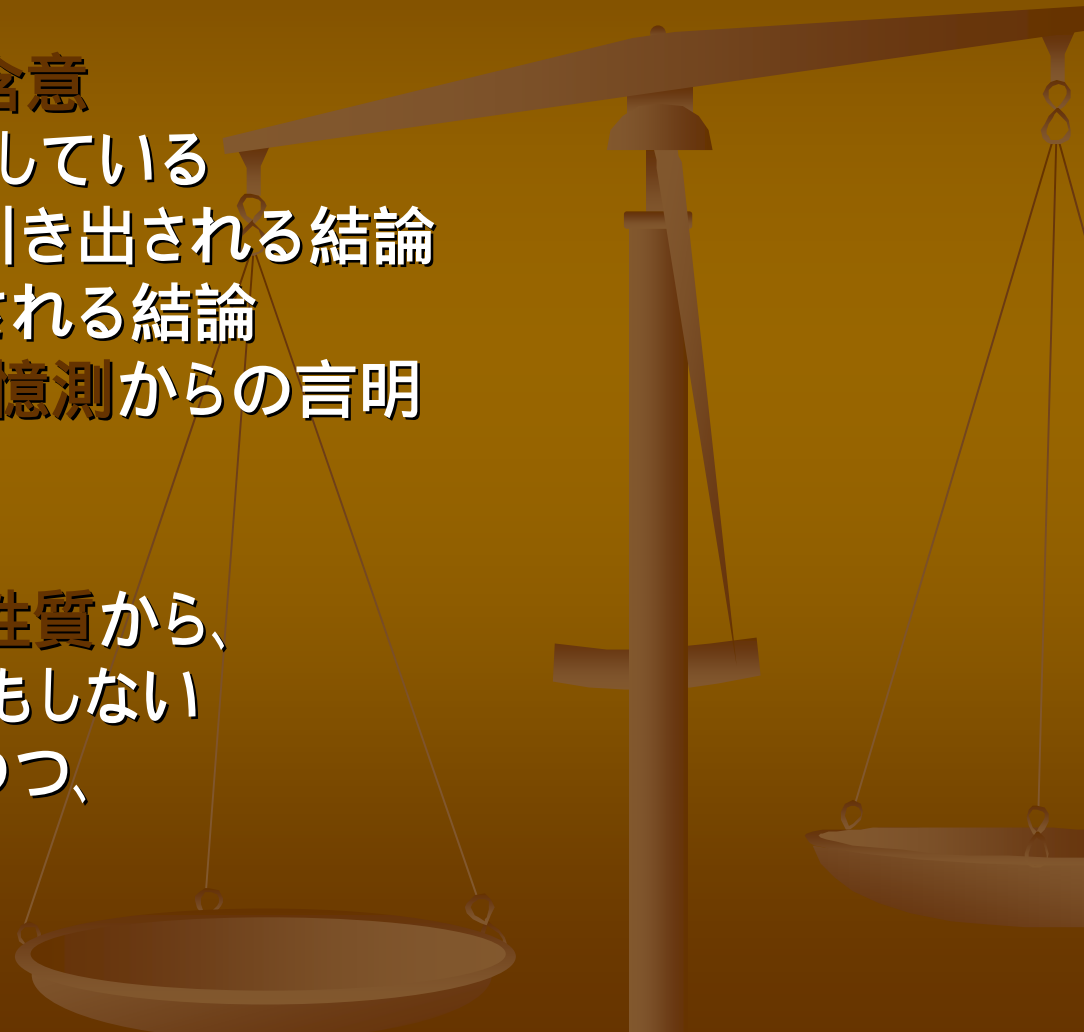
JECにおける「神学を研究する過程」

1. 聖書の資料の収集
 2. 聖書の資料の統合
 3. 聖書の教えの意味の分析
 4. 歴史における取り扱いの検討調査
 5. 他文化のもつ視点の検討
 6. 教理の本質の見きわめ
 7. 聖書以外の資料からの光
 8. 教理の今日的表現
 9. 解釈における中心的モチーフの展開
 10. 主題の層別化
- 

JECにおける「神学的権威の度合い」

1. 聖書の直接的言明
2. 聖書からの直接の含意
3. 聖書がおそらく含意している
4. 聖書から帰納的に引き出される結論
5. 一般啓示から推論される結論
6. 神学者のまったくの憶測からの言明

JECの働き人は、
その資料の源泉の性質から、
大きすぎも小さすぎもしない
妥当な価値を与えつつ、
資料を用いるべき



第5章 メッセージの今日化

1. 時代遅れへの挑戦

2. キリスト教における永続性の領域

- 制度・組織、神のみわざ、経験、教理、生活様式

3. 神学を今日化する二つのアプローチ

- 改変者×と翻訳者

4. 永続性の基準

- 文化を超えた恒常性、普遍性を示す状況、基盤とした認められた永続的要素、本質的なものとみなされた経験との確固とした結びつき、漸進的啓示の中での最終的位置を占めていること

「時代遅れとなること」 に対する」E Cの挑戦

1. 「聖書の世界」と「現代世界」の大きなギャップ
2. ブルトマンの極端な理解：神話的世界観と現代の世界観の極端な対比 「聖書の教え」の再解釈
 1. 三層の世界観、奇跡、悪霊、靈感、幻、靈的戦場、苦難・審判、救いか滅び、最終的狀態
 2. コペルニクスの世界観、四隅のある平らな地上×、悪霊ではなくウイルス、昇天の場所は宇宙のどこ×、再臨も神話で終りがあるとしたら核兵器による大虐殺
3. 現代のクリスチャンは二つの異なった世界に生きている
 - 日曜の午前は、斧の頭、川の水、ロバ、人、死者、処女が...
 - 平日は、テクノロジーや科学の発見が活用される異なった雰囲気の世界に生きて「心理的困難」を覚えている

JECにおける「永続性の領域」

1. キリスト教における永続性の領域

- 制度・組織、神のみわざ、経験、教理、生活様式などのいずれか？

2. エバンジェリカルとしてのJECの立場は

- 永続性の領域は「教理」である
- そして、この箇所で行われている意味ではないが「聖霊の超自然的働き」とそれに伴う経験の永続性を信じている。

「神学を今日化する二つのアプローチ」と JECの選択

1. 改変者

- 現代人に合わせて、メッセージの本質まで改変するべき

2. 翻訳者

- メッセージの本質を保持しつつ、提供する形式を工夫する
- メッセージには、歴史的に権威あるものと、普遍的に規範となる権威のあるものがある
- 洗礼と洗足の比較検討

JECにおける「永続性の基準」

- 永続的な要素と一時的形式を識別する
 - 識別の原則
 1. 文化を超えた恒常性
 2. 普遍性を示す状況
 3. 基盤として認められた永続的要素
 4. 本質的なものとみなされた経験との確固とした結びつき
 5. 漸進的啓示の中での最終的位置を占めていること
 - 啓示には必ずポイントがある
 - その基礎となっている真理とは何か：系図、公衆衛生の記事
- 